

【ポスター発表】

若者によるアンケート調査を通じたデートDVへの認識変化

—自由記述分析を通して—

○ 早稲田大学大学院 陶 嘉禎（禎）(009892)

キーワード：デートDV、当事者視点、質的データ分析

1. 研究目的

近年、恋人間に起きる暴力、いわゆるデートDVの増加とその内容の多様化がみられている。これまでに、デートDVの被害・加害経験の傾向、それに影響を与える要因を明らかにするために、2回のwebアンケート調査を実施した。自由記述の設問では、想定よりも回答者本人の経験や見聞きした友人の経験、またはDV・デートDVに対する感想など、多様な回答が得られた。10代や20代の若者はデートDVを知らない、または暴力行為に対する認識の不十分さにより、自身の被害または加害に気づきにくいこともありうると思われる。そこで、自由記述の回答の分析を行い、若者がデートDV調査への参加を通して、デートDVに対する認識がどのような変化があったのか、どのような気づきを得られたのかを明らかにし、当事者の視点から今後のデートDVの普及啓発や当事者支援の手がかりを探ることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

本研究は18歳～29歳の大学生・短期大学生・大学院生・専門学校生を対象とした。1回目の調査は2021年7月9日から11月22日まで、Googleフォームを使用して実施した。2回目の調査は2023年3月1日から3月6日まで、調査会社に委託して実施した。いずれも最後に調査内容に関する感想や調査項目以外に見聞きしたデートDVについて、自由記述の設問を設けた。

2回の調査で得られた自由記述回答は、「特になし」といった回答を除き、160件であった。それらを分析対象とし、佐藤（2008）を参考に質的分析を行った。具体的には、①定性的コーディング、②焦点的コーディング、③概念的カテゴリーの生成を行った。具体的に、自由記述回答データに対してその意味を表すコードをつけ、複数のコードに共通する概念を表すサブカテゴリーを構成し、サブカテゴリー間の関係やまとまりを検討し、より抽象度の高いカテゴリーを生成した。

3. 倫理的配慮

本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施した（承認番号2020-321）。調査実施にあたっては、Web調査画面で調査への参加が任意

であること、精神科・診療内科にて薬物療法・精神療法・心理カウンセリングを受けている者を対象外とすること、一部の質問項目による心理的不快が生じる可能性のあること、個人が特定されないこと、収集されるデータは研究遂行範囲のみに利用されることを明記した。本研究（本演題）に関連して、開示すべき利益相反（COI）はない。

4. 研究結果

160件の自由記述の中からデートDVに関連する文脈に着目して分析を行ったところ、97コードが生成された。コード間の関連を検討した結果、30のサブカテゴリー、6のカテゴリーが生成された。以下、代表的なカテゴリーやコードを示しながら結果を述べる。なお、コードを〈〉、サブカテゴリーを《》、カテゴリーを【】で示す。

若者がデートDV調査への参加を機に、〈デートDVという言葉は初めて知った〉、〈暴力を当てはまる行動を多く知った〉として《DV・デートDVに対する認知・認識の広がり》があり、《DVを身近な存在として認識》し、【DV・デートDVへの理解の深まり】があった。また、若者は調査を通して〈自身の受けていたことがデートDV被害と気づいた〉、〈自身の言動がデートDVにあたりと気づいた〉、《自身の被害・加害への気づき》が得られ、〈交際を改めて考える機会に〉をはじめ、《自身と他者の関係性への見つめ直し》ができ、【自身への振り返り】となった。《DV・デートDVを学んだ経験》が挙げられ、《被害に気づきにくいDV言動と暴力がエスカレートする構造》が知られていると同時に、今後より《DVへの学習の必要性》も挙げられた。しかし、〈デートDVの判断・線引きが難しい〉、〈自身が嫌でなければDVにつながるかとの疑問〉、〈DVの判断がつかず、どうしたらいいかわからない〉など、【DV・デートDVへの判断や対処の困惑と困難】も示された。

【デートDVに関する経験と見聞き】として、《性的暴力》、《身体に傷害を与える暴力》、《金銭的被害》、《自尊心を傷つけられる言動》、《行動の監視と制限による過度な束縛》、《威圧による支配》、《価値観の強要》、《身体的加害を使った脅迫》、《放置される》、《被害者ぶり》、《つきまとい・ストーカー》が挙げられた。

5. 考察

分析結果から、若者がデートDVに関する調査への参加を通して、デートDVを認知し、DV・デートDVの概念に対する理解が深まったと同時に、自分自身を振り返る機会となったことが示唆された。特に、これまでの被害や加害行為に気づいたことは、暴力の深刻化の予防となったと考えられる。これらのことから、デートDVそのものの予防教育だけでなく、具体例の紹介等を通して日常における自分自身の経験や見聞きと対照できる機会の提供が必要だと考えられる。今後は、若者がデートDVへの判断や対処における困惑に対して、当事者によるデートDVに気づくプロセスを検討していく。